

中国文学批評通史緒論 翻訳 其七・八：《南宋詩文批評・緒論》及び《宋代の詩話、詞論、小説批評と理学家の文学観・緒論》訳注

甲斐，勝二
福岡大学人文学部

東，英寿
鹿児島大学法文学部

<https://hdl.handle.net/2324/19709>

出版情報：福岡大学人文論叢．30（4），pp.2751-2776，1999-03．福岡大学研究所
バージョン：
権利関係：



中国文学批評通史緒論訳注 其の七・八

《南宋詩文批評・緒論》及び 《宋代の詩話、詞論、小説批評と 理学家の文学観・緒論》訳注

甲 斐 勝 二
※東 英 寿

はじめに

先回に引き続き*、今回は《南宋詩文批評・緒論》部分と、宋という時代を通して見た詩話、詞論、小説批評、理学家の文学観を論じた《宋代の詩話、詞論、小説批評と理学家の文学観・緒論》を訳出する。「説明」によれば、前者が蔣凡氏、後者は顧易生氏と劉明今氏（理学家の文学観担当）の執筆である。これで、《宋金元文学批評史》中に掲載された宋代部分の緒論翻訳の作業は全て終えることになる。

南宋の成立は靖康の変を経て北宋が滅亡したことによる。靖康2年（1126）3月、女真族の金は、上皇徽宗、皇帝欽宗をはじめとして北宋の宗室や官僚など数千人を拉致して北帰した。ここに北宋は167年をもって滅んだ。靖康の変当時、欽宗の弟・康王構は、多くの皇族の中でただ一人在京しておらず難を免れ、彼が皇帝の位についた。これが南宋の高宗であり、ここに中国の南半分しか領有しない所謂「半壁の天下」である南宋が始まる。北方を占有されたことは、南宋の政治上に新しい対立関係をもたらすこととなった。北宋後期には、新法党と旧法党という政治上の対立が生まれたが、南宋では北方を奪回し

* 鹿児島大学法文学部助教授

もう一度統一しようという抗戦派と中国の南半分の領土においてそれなりの安定と繁栄を築き上げようとする和議派との対立である。これは、文学作品においても影響を与え、徹底的な抗戦派の立場をとった陸游のような憂国の詩人が生まれた。また、晩年《四時田園雜興》を作り閑雅な江南の四季を歌った范成大も、憂国の思いは深く、かつて金に派遣されて、屈辱的な講和条件の改善をもとめさせられたときには、これを死を賭して成し遂げ名をあげている。南宋に生まれた新しい儒学思想も、北半分の国土の喪失にともなう憂国の意識と大きな関係があることは、すでに指摘されるとおりである。

ところで、陸游の詩は今日約一万首が伝わり、その詩数は古今の詩人のなかではずば抜けて多い。宋代の詩人は、概して唐代の詩人よりも残された詩数が多い。こうした現象は、科挙に対応する受験勉強により詩文制作の技術を身につけた知識人層が拡大したこと、その結果作詩が日常の中に浸透し、それを創作する機会が増加したこと等が背景にある。しかし、今一つ北宋から一般化しはじめた印刷技術の進歩によることも看過できない。特に南宋では営利出版が盛んになり作品を出版しやすくなった。これは写本でしか伝わることのなかった唐代に較べて、作品が伝わりやすくなったことを表しており、今日宋代の詩人が残す作品数が多いのはこうしたことも影響している。また、南宋の後期の臨安の書店の主人陳起は、同時に詩人でもあり、同時代の詩人の詩集を多く刊行した。彼が刊行した叢書を「江湖詩集」と名づけたことにより、これらの一派の詩人は「江湖派」と呼ばれた。こうした詩の意識的流派として最も早くまとまりをもって表れたのは、黃庭堅を祖とする「江西派」であり、それは南宋の呂本中が「江西詩社宗派図」という系図を作ったことから生まれた。この系図には26人が挙げられているが、実際にそうしたグループが結成されていたわけではない。ただ、「江西詩社宗派図」が作られて以降、南宋ではこの江西派及びその継承者が相当の影響を持つに至り、南宋前期から中期にかけて中心勢力となった。この様に詩派が意識的に作られたのが南宋からの現象であることも指摘しておきたい。おそらくそのような系譜付けによる現象が発達した背景には、北を失った南宋の知識人のアイデンティティーの問題がある。つまり系図という関係から文化伝統の継承を確認しようとする危機意識が伺われるように思われる。ちょうど、南北朝期、北朝に圧された南朝では史学が発達し、そのなかで多くの家譜が作られたように。その時文学の領域でもそれに対応するように文学ジャンルに系譜付けが行われ（文体流別）、詩人もまた系譜付け（《詩品》を見よ）が試みられているのである。

今回の訳注では、南宋文学批評の部分と共に、宋代を全体的に論じた詩話、詞論、小説

批評、理学家の文学観に関する部分を掲載するが、この部分は翻訳が基づく原書《宋金元文学批評史》の第三編に当たる。そこで語られる要素はいずれも宋代に始まる特色である。この中には、市民社会に向けて大きく時代が変化する中、新たな価値観に基づき文学を捉えようとする思想的な営みを読みとることも十分可能に思われる。

特に、思想家である理学家の文学観は、中国において社会を導こうとする儒学伝統から考えればむしろ「文学」観の王道を説くものである。漢代からつづく儒学思想家たちの文学観の流れの上にこれを位置づけることもできよう。また経学史の中で語られる「文学」の位置付けを通して、経学がその人間観をいかに変化させてきたかも伺える。なぜならば文学は人間の真実と縁が深いものだからだ。例を挙げれば、欧陽脩や朱熹に看られる《詩経》解釈の変化などは、詩文の実作者としての知識人の思想の影響のもとに起こったものだと考えられないか*。というのは、《詩経》は常に詩人の祖として語られており、新たな詩作思想の登場は、その祖とされる古典に新たな解釈を導くからである。だとすれば、詩文の実作者は、その知識人的位置から、思想家でもあり得るわけだから、彼らに近いものとして《詩経》が解釈し直され読み直されることも十分起こり得る。こういった視点から見れば、当時の詩文作家の思想と経学家の思想は、詩への視点を通して互いに影響を与え合う関係にあったと考えられる。その意味でこのような思想家たちの文学観を該書が積極的に取り上げる事は評価したい。

訳文末には例によって主な登場人物の年表を挙げた。生卒年が明らかでない者や、諸説あるものなどあって、必ずしも正確なものばかりではないが、翻訳を読むときに些かの参考になればと願っている。

* 《北宋詩文批評・緒論》訳注（上）（福岡大学人文論叢 30-1、平成10年6月）《北宋詩文批評・緒論》訳注（下）（福岡大学人文論叢 30-2、平成10年9月）。なおこの上下の部分は《宋金元文学批評史》では第一編に当たり、今回訳出した《南宋文学批評史・緒論》および《宋代の詩話、詩論、小説批評と理学家の文学観・緒論》は、それぞれ同書の第二編・第三編に当たる。

* たとえば、近人の周予同は朱子をつまるところは道学者に属すとはしながらも、“朱熹は道学を宗とする者ではあったが、文学にも素養があったので、（詩経解釈の）陳腐な説を抜けだして、恋の歌とすることを避けなかったのだ”（周予同《経学史論著選集》〈朱熹・第四章三詩経学〉上海人民出版社1983）と述べているし、このような新しい視

点が歐陽脩に始まることも既に指摘されている（馬秀娟《歐陽脩〈詩本義〉与宋代〈詩經〉研究》中華書局《中国古典与文化論叢三》）。

其の七

《南宋詩文批評・緒論》

南宋（1127-1279）の一五〇年余りの間は、天地動乱の激動の時代で、先鋭化した民族間の闘争や、激しい南北対立が各種の問題を呼び起こし、人々の心は大いに高ぶり、愛国精神も真剣に盛り上がったのである。同時に政権が南に渡ったために、中原の経済・文化・技術・知識及び熟練技術を持った労働者が大量に南に移り、南宋の封建的経済文化の繁栄を作り上げた。これこそ、南宋文学及びその理論批評が発展できた豊かな土壌となったのである。

南宋の文論は、中国古代文論の発展史上、前代をうけ後代につなぐ重要なつなぎ目となった。そこでは前人の経験や教えがまとめられたばかりではなく、当時の文学論争と文学運動にとりわけ着目された。またそれは更に進められて、目は未来に向けられ、後世を導き、それによってその理論の指導作用と影響が積極的に発揮させられたのである。

当時、中国の経済・文化の中心は南に移動していた。たとえば南宋の首都臨安は、多くの市民が集まり、文化が集まって、百万人余りの人口を抱える大都市になり、北宋の汴京よりももっと繁華になっていたのである。市民経済や市民階層の発展は、封建文学およびその理論批評に新しい衝撃と大きな影響を与えた。詞と小説などの新興の文学様式に関する理論批評の他に、詩文理論批評も同様に時代の新風の薰陶をうけ、幾多の新精神・新内容を持つようになった。

北宋の詩文革新運動の中で、歐陽脩・蘇軾等によって散文の革新作業は基本的に終了していた⁽¹⁾。しかし、宋詩の進路の開拓は、梅堯臣・歐陽脩の後に、蘇軾・黄庭堅を経て、まさに盛んになりつつあった。そこで、江西詩派の勃興によって、その探索と発展が続けられた。よって、南宋の文学理論の重点はすでに詩論の方面に次第に移ったのである。なかでも、江西詩派に対する検討は、南宋王朝が始まって終わるまで、南宋文学論界の中心の話題となり、宋詩の進路の新しい発展と密接に関係することとなった⁽²⁾。

江西派の詩論は黄庭堅に源を発する⁽³⁾。しかし、その理論の発展と成熟について言えば、北宋と南宋の交代期の呂本中⁽⁴⁾が大切な位置を占める。呂本中が若きときに作った《江西詩社宗派図》は、北宋後期の黄庭堅以下陳師道等の25人の詩人⁽⁵⁾を並べて詩法の伝

達者とし、江西詩派の形成と発展に対して、重要な作用を与えた。後人にはこの図が「公正な批評評価にもとづくものではない」（胡仔）⁽⁶⁾と批判するものもいるけれども、しかし、呂本中はまずはじめに江西詩社一派の呼称を掲げ、自覚的に古代文学流派の研究を進め、宋詩の道の開拓に対して、新しい貢献をなしており、その功績は無視できないのだ。呂本中は当時有名な理学家だったが、彼が詩を論じるときには、「詩」と「道（道学）」とは同じものではなく、二者は関係するけれども、区別があることを知っていた。彼の友人の汪革（字は信民）は江西の詩人であり、人から「詩の水準は日々向上するが、道学の水準は日々下がる」と評されたことがあった。しかし、呂本中は詩人の「本領はあちら側にあるのであり、こちら側にあるのではない」（《紫微詩話》）⁽⁷⁾と、はっきりと指摘している。詩歌自身がもつ芸術的な特徴は、道学的な「道」によってすべてを代替えるものではないのである。呂本中は黄庭堅の新しいものを作り出そうとする精神を継承していて、彼が詩を作るときまたは詩歌を批評するときは、明らかに芸術的法則の探求に重点を置いている。彼が提唱した「文気を養い保ち、規模を壮大にする」及び「活法」と「悟入」⁽⁸⁾の強調は、まさしく江西詩派の詩法に対する自覚的な理論的概括であり、芸術の審美規則の面から宋詩の発展方向を導こうとしたものである。彼と同時代の陳與義⁽⁹⁾と曾幾⁽¹⁰⁾は、創作及び理論において、共に彼と共鳴しあった人物である。中でも陳與義は、後人から江西詩派の「三宗」⁽¹¹⁾の一人と称されて、その創作に対する思想も大きな影響を生んだのであった。

しかしながら、江西詩派の下っ端となると、へたくそな勉強と間違った理解で、弊害が生まれてくる。呂本中在世の時、彼は《與曾吉甫論詩第二帖》の中で、「このごろの江西の学者は、あれこれのまねすることばかりに気を取られているけれども、そこから越え出るということを知るものは少ない、それはまた黄庭堅の主旨に違うものでもある」と指摘している。たとえば黄庭堅の詩は、それ自身に「新しすぎ、技巧をこらしすぎる」（《紫微詩話》）欠点があるが、後人はこれにそのまま従って、変えようとしない。このような創作が求められたら、宋詩の健康な発展に影響が出るのは当たり前だ。よって、呂本中がこれを救おうとした「悟入」と「活法」の諸論は、江西詩派の内部から宋詩の偏向した発展に対して警鐘を鳴らしたばかりでなく、また南宋中興の詩壇の理論的な思考法を啓発し、それによって宋詩の発展と繁栄を促進するものでもあった。たとえば陸游・楊万里等の中興の名家は、江西詩派から入り、江西詩派から飛び出し、江西詩派を越えたが、それは北宋南宋の交代期の呂本中・陳與義・曾幾らの先輩によって撒かれた理論のためなのである。

南宋詩壇の中興四大家「尤・楊・范・陸」(方回の言葉)⁽¹⁴⁾の出現に伴い、詩歌の創作も日増しに盛んになり、これに従って創作の道をまとめる理論的な思考も日々活発になった。陸游・楊万里は創作上の大作家だったばかりでなく、当時の詩人の中で理論に対する自覚をもった人物の代表である。陸・楊及びその影響を受けた諸家の詩論、姜夔⁽¹⁵⁾なども含めて、江西詩派に出入りのある彼らの詩論では、適宜随時に、宋詩の道筋の優劣や利害についてかなりまとまった議論をして、後人に大きな啓発を与えた。よって、彼らの理論は、自然に早期の江西詩派詩論と晩宋嚴羽《滄浪詩話》の間の橋渡しとなったのである。陸游・楊万里は詩歌創作の現実精神から伝統的江西派詩論に検討と批判を加えている。たとえば、陸游が提起した「詩外の工夫」(《示子通》)・「詩家三昧」(《九月一日夜讀詩稿有感走筆作歌》)等の議論⁽¹⁶⁾及び「憤鬱中不平」(《感興》)⁽¹⁷⁾の言葉、また楊万里が提唱した「詩もまた天下をただす道具である」(《詩論》)⁽¹⁸⁾の主張は、文学芸術の外部にある法則からの着眼で、詩歌と現実生活の密接な関係を強調し、江西詩派の下っ端たちの偏向を矯正するのに力があつた。それだけではなく、陸游・楊万里等の人物は、文学芸術の内部規律から出発して、江西詩派の前人たちが詩歌の美学芸術的規律に対しておこなった探索に考察を加え、更にそれを継承して発展させたのだつた。たとえば陸游は「私は茶山の一転語の話から、詩文につまらない言葉を混じえてはならないのだと知った」(《贈応秀才》)「詩文における換骨奪胎のやり方は、ただその根元を学んで信じることにのみ有る」(《示児》)といい、楊万里は「詩句の作り方は天も隠せるものではない、工夫をひたすらこらすだけで、柏の木の下でとりあえずは修行をし、桃の花を見て悟り終わるものではないか」(《和李天麟》)という。これらはまさしく江西詩派前人の詩律句法、悟入と活法の諸論に対する継承と発展なのである⁽¹⁹⁾。とりわけ、楊万里の提唱した形を捨てて精神を取る「詩味」の説(《江西宗派詩序》を見よ)は、江西詩派を江西出身の人だけに止めるものではなく、「味わいによるのであって、形式ではない」ことがその文学流派の形成と発展であると理解され⁽²⁰⁾、後人たちは文学流派の変化の角度から、江西詩派が提唱した宋詩の進路を深く研究する事になったのだ。これを要するに、南宋中期にあって、江西詩派の中心は長い間に弊害を生じ、これによって有識者たちから理論的な批判を浴びたのである。陸游や楊万里などの江西詩派詩論に対する検討と批判は、決してセクト主義の狭い視点から出たわけではなく、宋詩の健康的な発展を促そうとする立場に立ったもので、「宗家や流派の教えを守り伝える事は私には恥だ、作家はそれぞれ自分の風格を作り上げるべきだから」という高らかなスローガン(楊万里《跋徐恭仲省幹詩》を見よ)は、中興の詩

歌の冷静な理論的思考と新しいものを生み出そうとする意識を明らかにするものだ。宋詩の芸術的な創造は、唐詩とは違った新しい道を開いたところにある。この成功は、理論に対して自覚的に深く研究を進めた事と密接な関係がある。よって、陸游や楊万里らは、江西詩派の詩論を積極的に糾弾したけれども、それは江西詩派の矯正と発展に向けられたものと見るべきで、彼らは江西詩派のまともな伝授者で、決して理論的な反逆者ではないのである。

まさに理論のピークを迎えたのは、南宋の晩期だといわねばならない。当時国家の状態は急速に悪化しており、厳しい現実と直面して、詩人及び詩論家の態度は同一ではなく、立場もそれぞれ異なり、それぞれ自分の考えを持っていた。彼らはおのおの異なった角度から当時の宋詩の進路への理論に対してさらに活発にまた深く考えたのである。たとえば、永嘉四靈⁽²¹⁾と江湖詩派⁽²²⁾は、基本的には共に江西詩派を批判しようという立場であり、芸術上は晩唐を尊んだが、これは宋詩の進路を根本的に否定しようとするものではなく、全くその逆で、当時の宋詩の欠陥を補っているのだ。江湖派前期の理論的な気風を初めて開いた戴復古⁽²³⁾、その《論詩十絶》⁽²⁴⁾は、まさしく杜甫の《論詩六絶句》を継承していっそう輝くものである。その理論は実践性をかなり強く持ち、経験によって体得された言葉に、細やかな理解が示されている。「さすらいの愛国者杜甫、寓意詩に嘆いた陳子昂」（《十絶》の六）の句には、江湖詩人の中で傑出する者の、時代を痛み国を憂える胸の内を見て取れる。現実と人生に直面して、彼らも宋詩の発展のために向上の道を示そうと努めたのである。戴復古は詩論の中で芸術的審美意識を強調するけれども、それは決して現実の人生から離れるような唯美主義の道ばかりでないことは、これによって証明できる。劉克莊⁽²⁵⁾の場合は、江湖詩派の後期の領袖となって、その思惟はさらに広がりを見せる。彼は、ためになる事を広く求めて多くの師につき、一つの形ばかりにこだわらず、自分独自の視点を作り上げる事を力説し、また宋詩の新しい情勢での発展のために理論的な総括をなす事に努めた。彼の詩論は、主に当時の宋詩が如何にして健康に発展するかを巡って議論を展開したものである。劉克莊は、唐詩がその前代の《文選》の詩に及ばず、宋詩もまた唐詩には及ばないという復古退歩論を厳しく糾弾しているが、それはまさしく彼の当時の宋詩の発展に対する熱い気持を示すものであった。彼は、宋詩を唐詩に比べても、それぞれに立派な特徴があり、何ら恥じるところはないとして、明快に「唐代の詩に遜色はなく、むしろ勝っているではないか」（《本朝五七言絶句》）と述べている。とはいえ、進歩を望めば批判も必要だ。当時の詩壇の弊害に対しては、矢を射るような批判を展開して

いる。これは正に治療のためであって、その目的はやはり宋詩の発展のためなのである。彼は游黙斎の言葉を引いて、「近頃江西詩派を学ぶ者は、学び方がへたくそで、響きはごつごつして、表現は露骨である。しかも議論ばかりで、昔の詩が性情を歌うという本来の性質を失っている」⁽²⁶⁾と、江西詩派の下っ端たちに対して、なんの容赦もなくその内実を暴いている。彼はまた、「古典の字句にたよって詩を作るのは、陳腐に落ち、古典を捨てて詩を作るのは、粗野に落ちる。」(《跋韓隱君詩》)とも指摘している。ただ単に江西詩派の「古典に借りる」失敗に向けたばかりでなく、同時に自分が代表する江湖詩派の「古典を使わない」欠点を厳しく批判するものでもある。彼はまたある道理学者の押韻に関する講義を大いに非難して、「近世に道理の学問が興って詩の規律が破壊された」(《林子瓘詩序》)という名言がある。中でも尤もすばらしいのは、彼はただに批判するのだけではなく、導き、変化させようとしており、決して酷評してばかりはいないことだ(《跋李耘子所藏其兄公晦詩評》)。「黃庭堅・陳師道を理解し超越するには、あえて風月によって旗を振る必要があろうか」(《又和张使君》)の語は、簡明に彼の江西詩派と宋詩の進路についての態度を語っている。「江西派の人は皆文集があり、その境地は黃庭堅と楊万里を師とする。ただ白日の下のロバに乗る年寄りだけはあえて派の中には加えなかった」(《湖南江南道中》)では、克莊の江西詩派に対して行った批判こそが、本当の関心なのであって、彼自身は江西詩派とばれることはなかったけれども、実際は江西詩派であったことがわかる。江湖詩派は発展して劉克莊にいたり、新たに江西詩派と合流したのだ。故に、その詩文理論批評は、互いに受け継ぐものがあり、また互いに啓発しあうところもあったのである。

宋代の詩論のピークの到来を反映するのは嚴羽⁽²⁷⁾の《滄浪詩話》⁽²⁸⁾である。宋の詩話の中では、これは理論的体系をもった作品であり、詩話著作形式で詩歌の芸術理論を検討したその書の誕生は、更に自覺的な段階に踏み込んだ事を示している。中国古代文論史上で、《滄浪詩話》は伝統を受け継ぎ、後代を導いた。一方では宋詩の発展の道を理論的に総括しようとしながら、その一方では後世の詩話の論争と発展を啓発したのであった。

《滄浪詩話》は全部で五章、《詩弁》は理論綱要、《詩体》は詩歌の形態と、風格の流派を検討し、《詩法》は制作方法と創作の原則に重点があり、《詩評》は具体的な批評と鑑賞を展開し、《考証》は伝統的な詩話の随筆記事に沿って、作家と作品に考察を加えている。と共に、書籍の後に一編の《答出繼叔臨安吳景仙書》が付されており、その理論の主旨や意図、及びその批判対象についてははっきりとした説明がなされ、《詩話》の序言だと見な

すことができる。五章と一通の書簡、これが有機的に統一されて、自己完結した詩論の体系を形成している。嚴羽は特定の時代のキャンパスに自分の詩歌美学の設計図を描いたのであった。当然、その理論体系には明らかな限界がある。抒情詩の芸術的特徴面の検討では、嚴羽は確かに前人の群を抜いたけれども、しかし、実際の思想の面では、その理論の明確性では明らかに陸游・楊万里の諸人に引けを取ってしまう。芸術の水準についていえば、漢魏の古詩と盛唐の響きを提唱して、独特の見識をもったけれども、しかし、詩歌の通俗性と明朗性をおとした評価には、大きな偏向性があったのだ。さらに、彼が蘇軾・黃庭堅の詩風を批判して、唐代を高く評価し宋代を低く評価するとき、その認識は全面性に欠いている。

同時代の劉辰翁⁽²⁹⁾もまた宋末の著名な詩文評論家である。彼にはきちんとした詩文理論の総括があるばかりでなく、宋一代の詩が経た道の経験と教訓も総括した。しかも、具体的な詩文批評の作品も多く、その細やかな芸術的分析は、直覺妙悟の感性的体験に重きが置かれている。これは嚴羽の《滄浪詩話》の批評と鑑賞に方法が似て、後世の詩文批評の作品を多く導くことになった。劉辰翁はその上小説批評の先駆けともなったが、これについては本書第三編第四章を参照されたい。

これを要するに、南宋晩期、それは宋代詩論の発展の一つのピークでもあった。戴復古・嚴羽・二劉（克莊・辰翁）等の大家が、力を合わせてピークを出現させ、またそれぞれがかなり大きな理論的影響を生み出した。それぞれの相違のなかで、二劉を比べてみると、劉克莊は先輩であり、劉辰翁は亡国の悲しみを経ており、その理論の重点はそれぞれ異なる。劉辰翁は小説及び詩文批評を主としたが、劉克莊は伝統詩文の総合的研究の道を行んだのであった。戴復古は、創作における苦しみの言葉が多いけれども、結局のところ嚴羽と二劉の理論批評の全面性と体系性には敵わない。しかし、劉克莊と嚴羽を比較すれば、それぞれの理論には特徴があり、互いに対立する面を持ちながら、また互いに説明しあう一面もある。理論における度胸と見識、新しさを作りだし、独自に一家を立てるという点では、嚴羽の方が優れている。理論の全面性と宋詩の発展に貢献したという点でなら、劉克莊が優れている。これを要するにこれらの晩宋の文論家は、それぞれが異なった角度から宋詩の進路に理論的な総括を行い、また共に理論発展の高波を巻き上げたのである。

両宋の詞論と道理学家の文論は、共に当時の文学批評の高波を形作る要素であるが、それについては本書第三編の中で別に章を設けて紹介しよう。

注釈

(1) 嘉祐二年(1057)の科挙の試験で権知貢挙となった歐陽脩が、当時流行していた險怪奇渋の太學体で書かれた答案を斥け、明快達意の古文で書かれた答案を採用した。それにより、蘇軾・蘇轍兄弟や曾鞏ら後の著名な古文家が及第することになり、以後文人達は明快達意の古文の習得に励み、その文体が主流となった。従って、北宋の古文復興史においてこの嘉祐二年の科挙は看過できず、この科挙を以て当時の散文の文体改革はほぼ達成されたと言える。なお、嘉祐二年の科挙で斥けられた文体については、東英寿「『太學体』考—その北宋古文運動に於ける一考察」(日本中国学会報第40集、1988)を参照されたい。

(2) 北宋中葉以降、黃庭堅を祖とする江西詩派が生まれ、それ以後の宋詩の發展に大きな影響を与えることとなった。黃庭堅や陳師道を中心とする江西派は、元祐の党禁により抑圧され弾圧された。南宋に至ると党禁は既に解禁されており、抑圧の反動もあって、江西派が南宋の詩壇の主流となった。更にそれを批判する勢力も生まれ文学論争が盛んになった。江西派を支持する文人や批判する文人が現れたのは、どちらにせよ江西派の詩論が当時の文人達に広く深く入っていることを物語っている。従って、南宋の詩壇は江西派を軸として展開していくことになる。

(3) 黃庭堅(1045~1105)は江西派の宗祖と言われる。江西派の名称は呂本中が作った《江西詩社宗派図》からでたものである。《江西詩社宗派図》の中で、呂本中は黃庭堅を李白・杜甫以降衰えた詩壇を奮い起こした最大の詩人として位置づけたことにより、黃庭堅は江西派の宗祖と見なされることとなった。原書第一編第六章第一節に詳論あり。

(4) 呂本中(1084~1145)、字は居仁、祖籍は東萊(今の山東東掖県)、後に寿州(今の安徽寿県)に移った。東萊先生或いは呂紫微と称される。彼は元祐年間の宰相・呂公著の曾孫で、宣和六年(1124)に枢密院編修官を授かり、靖康初には祠部員外郎に任じられた。紹興六年(1136)には進士出身を賜り、中書舎人、権直学士院を歴任した。主要著作は、《春秋集解》十卷、《東萊詩集》二十卷、《童蒙訓》三卷、《官箴》一卷、《東萊呂紫微師友雜志》一卷、《紫微詩話》一卷がある。別に今人が集めた《童蒙詩訓》がある。原書第二篇第二章第二節にて詳論あり。

(5) 《江西詩社宗派図》には、黃庭堅、陳師道、潘大臨、謝逸、洪芻、饒節、僧祖可、徐俯、洪朋、林敏修、洪炎、汪革、李錡、韓駒、李彭、晁冲之、江端本、楊符、謝邁、夏

倪、林敏功、潘大觀、何顗、王直方、僧善權、高荷、合計二十六人が列挙されている。この《江西詩社宗派図》は、呂本中が崇寧元年（1102）か二年、十九か二十歳頃の時に作ったもので、血氣盛んな青年の時の作であり、認識は不十分な点もあるが、また新たな見識もあり、決して看過できないものである。

（6）胡仔《苕溪漁隱叢話前集》卷四十八に「居仁の此の図の作は、選擇精ならず、議論公ならず、余是を以て之を辨ず」とある。

（7）呂本中の《紫微詩話》に言う。「汪信民革、嘗て詩を作り謝無逸に寄せて云ふ。……信民に謂ひて曰く、公の詩は日々に進むも、而るに道は日々に遠しと。蓋し用功は彼に在りて此に在らず。」と。原書第二篇第二節三「活法」和「悟入」参照。

（8）活法は詩作の一種の方法であり、悟入は詩の理解と掌握の方法の手がかりである。呂本中の《夏均父集序》に「詩を学ぶは當に活法を識るべし。所謂活法は、規矩備具して能く規矩の外に出づ。変化不測なれど亦た規矩に背かざるなり。是の道や、蓋し定法有りて定まること無く、定法無くして定法有り。是れを知る者は則ち以て興に活法を語るべし。」と言う。悟入については、呂本中《童蒙詩訓》に次のように言う。「文を作るは必ず悟入の處を要す。悟入は必ず工夫の中より来る。僥倖して得べきに非ざるなり。老蘇の文に於ける、魯直の詩に於けるが如きは、蓋し此の理を盡すなり。」と。

（9）陳与義（1090～1138）字は去非、号は簡齋。祖籍は京兆（今の陝西西安）。曾祖希亮が始めて河南洛陽に遷ったので、陳与義は洛陽の人となった。徽宗政和三年（1113）二十四歳の時、上舍甲第を賜り、文林郎を授かった。《墨梅》詩が徽宗により激賞され、太学博士著作郎に拔擢され、符寶郎に昇った。北宋の滅亡により南に移ったが、これを契機にして詩歌創作に変化が生まれ、その作品には愛国憂民の思いが充満することとなった。建炎四年（1130）に召されて兵部員外郎に任じられ、中書舍人參知政事に至った。その著には《簡齋集》三十卷、《外集》一卷、《無住詞》一卷がある。

（10）曾幾（1084～1166）字は吉甫、河南の人。後に茶山に寓居したので、自ら茶山居士と号した。上舍出身を賜り、国子正に拔擢された。紹興中に浙江提刑を歴任したが、彼の兄・開が秦檜の怒りに触れたことにより、幾も罷免され、上饒の茶山寺に隠棲した。秦檜が死亡した後、知台州になり、官は権禮部侍郎に昇った。乾道二年（1166）八十三歳にて卒し、文清と諡された。彼の文は純正雅健で、詩に尤も優れ、陸游の師として名高い。《經説》二十卷、《茶山集》三十卷がある。

（11）江西詩派の三宗に関しては、方回の《瀛奎律髓》に「老杜、山谷、後山、簡齋の

四家は、一祖三宗なり」と言う。一祖は杜甫のことで、三宗は黄庭堅、陳師道、陳与義である。なお簡齋は陳与義の号である。

(12) 陸游 (1125～1210)、字は務観、号は放翁。山陰（今の浙江紹興）の人。彼が誕生した翌年に靖康の変に見舞われ、中国は南北対峙状況となった。陸游は失地回復を目指す抗戦主義者でありそれは彼の作品に表れている。紹興二十三年（1153）に省試に臨み第一位となるが、宰相秦檜が同じく受験していた孫の埈を一位で合格させようとして妨害し、殿試で落第させられた。秦檜の死後、三十四歳の時初めて官界に入り、福州寧徳（福建省寧徳県）の主簿につき、その後地方や都の諸官を歴任した。《劍南詩稿》、《淮南文集》、《老学庵筆記》、《南唐書》等がある。原書第二篇第三章第二節にて詳論あり。

(13) 楊萬里 (1127～1206)、字は廷秀、号は誠齋。吉州吉水県（今の江西に属す）の人。紹興二十四年（1154）の進士。同年の合格者には范成大がいる。地方官を歴任したが、しばしば直言して時政を論じ、また抗戦派としての妥協のない主張は和平派の大官の反対に遭い、結局中央ではあまり出世できなかった。現存する詩の数は四千二百余首にのぼる。彼は日頃書きためた作品を生前に官を移るごとに一集ずつにまとめた。すなわち、《江湖集》、《荆溪集》、《西歸集》、《南海集》、《朝天集》、《江西道院集》、《朝天統集》、《江東集》、《退休集》の九集である。彼の死後、嘉定元年（1208）息子の長孺が詩文を合わせて《誠齋集》一百三十三巻を選定し、端平元年（1234）には門人羅茂良が校訂して刊行した。原書第二篇第三章第三節にて詳論あり。

(14) 方回《跋遂初尤先生尚書詩》に「宋中興以来、治を言ふは必ず乾淳を曰ひ、詩を言ふは必ず尤、楊、范、陸と曰ふ。……特に名を天下に擅にす」とある。尤とは尤袤 (1127～1194) 楊とは楊萬理 (1127～1206) 范とは范成大 (1126～1193) 陸とは陸游 (1125～1210) のことである。

(15) 姜夔 (1155?～1221?)、字は堯章、別号白石道人。鄱陽（江西省波陽県）の人。若いときから詞の名手として知られ、作曲も能くした。姜夔の詞集《白石道人歌曲》には詞の楽譜（工尺譜）が17首に残っている。これは今日に残された唯一の詞の楽譜資料であり、それに基づき詞の音楽の復元も試みられている。原書第三篇第三章第六節に詳論あり。

(16) 陸游は文学作品の成就是言語技巧の鍛練だけでなく、もっと重要なのは生活体験であるとして「詩外工夫」「詩家三昧」を主張した。

(17) 文章とは気を以て主体とするが、気は決して文と同等ではない。作家の具体的思

想、感情を経た後、それが文章に表れるもので、詩は自己の芸術の表現であり、とりわけ感情を重んじる表現である。従って陸游は忠義より出た不平の気を高らかに唱え、悲憤を表現することを重んじた。陸游は、屈原の「発憤抒情」、司馬遷の「発憤著書」、韓愈の「不平則鳴」等の説を継承し発展させたのである。

(18) 詩歌の社会的任務は善を頌揚し、不善を矯正することにある。詩歌は特殊な効能があり、至情に通ずることを表すので、人心に感染させる風諭的作用がある。従って、楊萬里は詩歌とは人心の過ちを改め、善に返す作用があると認めるのである。

(19) 陸游は曾幾（号は茶山）に詩を学んだことにより、江西詩派を学んだ。楊萬里も江西詩派の詩説を学ぶことから、最終的には江西詩派のありきたりの型からぬけだし、一家をなす要因となった。

(20) 《江西宗派詩序》によると、形のうえからは、江瑤桂と荔枝は似てなく、杜甫詩は史記の様ではない。しかし、もしも伝神風味の点から見ると、それが似ていてもなんら問題にならない。というのも、江瑤桂と荔枝はいずれも独自の風味を持っており、杜甫詩と史記はどちらも社会や人生に着眼する精神は同一だからである。よって、楊萬里が詩を論じる際には形の同一性を求めず、専ら神気を重んじ風味を求めるのである。

(21) 永嘉四靈とは、永嘉出身の徐璣、徐照、翁卷、趙師秀の四人のことで、いずれも字号に靈字を含むことにより名づけられた。かつて永嘉に左遷された劉宋の詩人謝靈運にちなむ。四靈達は唐詩の復活を主張したが、その唐詩とは中晚詩であり、特に中唐の賈島と姚合の枯淡な詩境を模範とした。

(22) 江湖詩派の名前は、自らも詩人であり臨安の書肆の主でもある陳起（?～1256?）が《江湖集》を刊行したことに基づく。この《江湖集》のシリーズに名を連ねた詩人達を江湖派と呼ぶ。宰相の史弥遠がその文学に風刺があるとして陳起は流罪になり、江湖集は破棄されたことにより、かえって江湖派の名声が定着することとなった。江湖派の詩人は崇寧年間から南宋末まで活躍した。代表的詩人としては戴復古、劉克莊がいる。理学家が唐詩を抑えることに反対し、また江西派が杜甫詩を師とすることを批判した。彼らは永嘉四靈の創作思想を発展させたと言われる。

(23) 戴復古（1167～1248?）、字は式之、号は石屏。台州黄巖南塘（今の浙江温嶺県）の人。江湖派の詩論を開く人物とされる。一生仕官せず、各地の高官に詩を売り歩くことで生計を立てた職業詩人であった。八十歳以上まで生きたことは確実で、晩年は故郷で過ごした。著に《石屏詩集》十巻がある。その内訳は、巻一から巻七までが詩集で、巻八は

《石屏詞》、卷九、十は裔孫の詩を収録している。原書第二篇第四章第一節にて詳論。

(24) 戴復古の《論詩十絶》については、たとえば宗廷輔の《古今論詩絶句》では非常に高い評価をしている。曰く「宋人の詩を論ずるは、都て詩話に見はる。惟だ詩を以て詩を論ずるは、止だ此の十絶のみ。石屏の一生の得力は、略ぼ此の十絶中に盡くす。則ち有宋一代の詩学も、亦た此の十絶中に包む。」と。

(25) 劉克莊(1187~1269) 初名は灼、仕官して後、克莊と改めた。字は潜夫、後村居士と号した。莆田(今の福建省莆田)の人。江湖派の詩論の集大成者として位置づけられる。二十三歳で入仕して以来、長く地方官を歴任し、多くの詩人名士と交遊した。六十歳の時、詩文によって皇帝・理宗の知るところとなり、特に同進士出身を賜った。景定元年(1260)七十四歳の時に再び朝廷に入り、中書舍人、兵部侍郎、樞工部尚書の諸職を歴任した。景定四年(1264)龍図閣學士を以て致仕した。諡は文定。著に《後村先生大全集》一百九十六卷、《分門纂類唐宋時賢千家詩選》二十二卷がある。《後村先生大全集》の卷一百七十三から一百八十六までは詩話で、後人の編纂により《後村詩話》十四卷として通行している。《分門纂類唐宋時賢千家詩選》は、唐から宋に至る詩人五百六十五家、詩一千二百八十一首を納めるが、その大部分は宋詩で、とりわけ南宋詩が多い。劉克莊が当代文学を重視する傾向が窺える。原書第二篇第四章第二節にて詳論あり。

(26) 《後村詩話》所収。

(27) 嚴羽、字は儀卿、又の字は丹丘、滄浪逋客と号す。邵武(今の福建に属す)の人。著に《滄浪集》、《滄浪詩話》がある。彼の詩の多くは散逸し、後人が搜輯して《滄浪吟卷》三巻を編した。この巻一は《滄浪詩話》で、《答出繼叔臨安吳景仙書》を附し、巻二、三が諸体の詩詞である。現存する彼の作品は詩話一部、文一編、詩一百四十六首、詞二首である。彼の生卒年は史書上に記載はないが、紹熙三年(1192)前後、卒年は諸説がある。王士博《嚴羽的生平》、陳定玉《嚴羽考辯》では1245年前後、蔡厚示《嚴羽卒年及行蹤略考》では1255年前後、王運熙《嚴羽和他的詩歌創作》では1265年前後となっている。原書第二篇第五章にて詳論。

(28) 《滄浪詩話》は多くの叢書中に収録されている。注釈本は、清胡鑑《滄浪詩話注》、王璋慶《滄浪詩話補注》、胡才甫《滄浪詩話箋注》、今人郭紹虞《滄浪詩話注釈》等がある。邦訳としては朝日出版社中国文明選《文学論集》の中に所収。

(29) 劉辰翁(1233~1297)、字は會孟、号は須溪。廬陵(今の江西吉安)の人。須溪集一百巻があったようだが散逸し、清人が輯めて須溪集十巻を作り、今人が増補して劉辰翁

集十五卷（江西人民出版社、1987、段大材校点）を作った。劉辰翁の評点は、文学上の視点からその長所や欠点を指摘するところに特色がある。明人は彼の評点する所を集めて、《劉須溪批評九種》を作っている。その内容は、《班馬異動評》三十五卷、《老子》、《莊子》、《列子》上下卷、《世説新語評》三卷、《王摩詰詩評》四卷、《杜工部詩集解》二十卷、《李長吉歌詩評》四卷、《蘇東坡詩評》二十五卷である。その他、《劉須溪批評九種》に含まれずに現存している評点は、《孟浩然詩集評》二卷、《王荊公詩文評》五十卷、《須溪精選陸放翁詩集評》八卷、《須溪評点簡齋集》三十卷（附《住詞評》）である。彼の評点するところは、非常に広くかつ精密で、中国の小説の評点の先駆けとなった。たとえば彼の《世説新語評》は、明清兩時代に盛行した小説の評点に大きな影響を与えている。原書第二篇第六章にて詳論あり。

其の八

《宋代の詩話、詩論、小説批評と理学家の文学観・緒論》

宋代文学批評の広大な花園にはたくさんの花が咲き乱れ、その中には開いたばかりとはいえ際だって鮮やかに咲き誇る美しい花が幾種かあった。それは詩歌について語る専著形式つまり「詩話」の誕生と繁栄であり、新しく興った文学ジャンルである「詞」及び「小説」に関する批評の成長と発展などである。さらに「理学」（「道学」とも呼ばれる）が当時の新しい儒家学派となって、文学の分野でもその独特の見解を示し始め、大きな影響を与えてもいた。よって、本書ではこれについて特に一編を設け、おのおのユニークな特徴を持つこの四種について、以下の各章にて述べることにしよう。

一、詩話について

詩話は詩について語る専著で、宋代に興った新しい形式である。北宋の詩文革新運動の指導者歐陽脩によってはじめて作られた⁽¹⁾。その後たくさんの作者が現れて、その著作は非常に多くなった。今人の郭紹真の考証によれば、宋の詩話で、欠けずにそのままの形で今に伝えられているもの、全体は滅びたが他書に引用された部分を集めることで元の形が想像できるもの及び名前のみが確認できるものなどをあわせると約一四〇種あまりあるそうである。当時の盛んな制作状況がわかるだろう。

詩話が宋代に興ったその主な理由は、唐宋の時期に詩学がピークにまで発展し、宋代になって創作の経験が大量に蓄積されていたところに、宋人の議論好きの気風が詩壇に流行

したためである。その詩話という名前も、新興の民間文学である「説話」、「平話」の影響を受けているのであろう⁽²⁾。詩話の形式がひとたび現れるや、作者や読者に広く採用され、歓迎され受け入れられることになった。それは、その形式の緩やかさ・自由さ・活発さ・みずみずしさ、豊かな機能を備えながら一つの形にとらわれないところと関係がある。詩話の中で作者は興趣の湧くところにしがいい、筆の赴くままに詩歌創作の主題や裏話などを記録し、詩人の創作経験で得た事を述べ、詩編や詩句、ポイントとなる語句について鑑賞し批評する事ができた。また、細やかで深い理論的検討をすることもできた。しかも、このような事柄を一つに溶け合わせ、深遠な内容を簡単に表現して、心情と表現が渾然一体となり、諄々とした閑談の中に思想が隠れきらめいているのが常だった。そこには、歐陽脩の《六一詩話》のように雲や水のようにこだわりなく流れながら、至る所におもしろさがあるような随筆形式のものもあれば、また嚴羽の《滄浪詩話》⁽³⁾ のような理論的な枠組みをたて、鋭い切っ先も露わに、はばかりなく堂々と発言するようなものもあった。作者は己の感覚・観点を述べる自由をしっかりと自分のものにしていたので、それを読んでみると味わい深い情熱が感じられる。よって、詩話のジャンルが確立されるや、元・明・清の時代からアヘン戦争以後の近代に至るまでの長い間、中国文学批評史において詩を論じる重要な方法となった。さらにその他のジャンルについて語る文話や詞話・賦話等の類似の專著形式がその影響で生まれて来た。まことに根が深ければ葉は大いに茂るというものである。

本編第二章では宋代詞話の発展及びその理論批評に対する概括的な紹介を行っているので⁽⁴⁾、本書《宋金元文学批評史》第一、二編の北宋・南宋詩文批評の記述をも参照していただきたい。

二 詞論について

詞は詩歌における新しいジャンルとして成立したが、伝統的な詩歌とは次第に隔たり始め、独立した分野を作るようになった。詞は隋唐の間に生まれ⁽⁵⁾、晚唐五代に盛んになりはじめ⁽⁶⁾、宋代でピークを迎えた⁽⁷⁾。宋词は、宋代文学を代表するのとなり、中国文学史にあって唐詩と並べて称されるほど盛んになったのである。宋代の詞学批評もかなり発達した。その中には新しい思潮と時代精神が燦爛と輝いている。

宋人は詞に関して初めは真っ当なものとは見なしていないが、娯楽として愛してはいた。「曲子」「小詞」「詩余」⁽⁸⁾等、詞に付けられた呼称には輕視の意味が含まれている。唐宋

の詞は当時の楽曲の曲調に合わせて歌った歌詞であった。その当時に新しく興った楽曲の主なものは民間の通俗楽曲および辺塞の少数民族や中国の外から入ってきた曲調である。その音節の抑揚は明快で、変化に富んだものであったので、昔ながらの「中和」を宗とする伝統音楽とはその味わいが大いに違っていた。歌詞の形式もその音楽に従って長短句が入り乱れ、奇数偶数句が混じり合っている。これを全体的に整然とした伝統的な古体・近体の詩歌に比べると、その旧形式の限界を大いにうち破ったものとなっている。よって、詞は独特の芸術的な魅力を持ちながらも、それが故に却って正統的な觀念から蔑視されることになった。これに加えて、これらの新興の曲調は、当初は芸能人の演奏から文人才子の手に伝わったものが主であった。風流な才子が宴会を歩き回るとき、興を盛り上げるために、筆に任せて作り上げ、それを歌わせる。そのような場では、留め難き時の流れ、風月の美しさ、情愛の物語などの歌が作られるのは自然である。詞は「小道（小技の利いた口芸）」「艷科（艶っぽい歌）」とも見なされて、文人たち公認の格調高い地位に上がることができなかったのである。南宋の胡寅⁽⁹⁾はこの歴史を振り返って、「詞曲というのは、古楽府から枝分かれしたものだ」、「曲と名付けるのは、人の心情を委曲を尽くして述べるからである。医術や絵画などの委曲を尽くした技術に比べれば及ばないし、礼について語る《曲禮》からは遠く離れている。そういうわけで文士たちには、詞を作って心情を表すものが多いのだけれども、真っ当ではないという批判を嫌って世に伝えようとせず、歌姫に戯れて作ったままだと弁解しているのである」という⁽¹⁰⁾。当時の多くの文人たちが詞にむけた態度がここに述べられている。

詞が軽視されたのは確かに不幸ではあったが、別の観点から見れば大きな幸せであった。なぜならば、作者はそこで「詩教」・「明道」という礼服を脱いで輕装に着替え、自分の心中に沸き上がる情感をおそれるものなく可能な限り表出する事ができたし、形式上でも格式張った大げさな様式の束縛から免れて、大胆に新鮮で活発な言語のリズムを取り入れ、作品に躍動する生命力を持たせ、色とりどりに輝かせることができたのだ。

宋代初めの潘閬が「わだかまる気持ち、漂いゆく情感、それはすべてここに現れている」⁽¹¹⁾と言った言葉、陳世修が馮延巳の詞を論じた「思いは深く文辞は麗しく、韻律の調子も新しい」⁽¹²⁾という語は、このような特色を物語る。北宋の多くの詞人、つまり晏殊・張先・歐陽脩・柳永・蘇軾・晏幾道・秦觀などは個人の感情の表出を詞を書く主要な目的としており、「情」が人として固有のものであり、天の賦与するものであることを強調して、自ら「多情」⁽¹³⁾・「情癡」⁽¹⁴⁾と呼ばれていた。彼らの詞の中で、男女の愛情を専ら記し

たものには、封建的な拘束をうち破るような普遍的な意義がある。また国家を愛し、自然を愛することを強調する豪放な精神のものは、強烈な主体意識と反抗精神を持ってもいた。そこには、人間性への目覚めと個性の解放の要素が含まれているのだ。これは、新しく興ったという意識を持った文芸思潮がきらめかす波の輝きなのがある。宋代のこのような主張は主に詞壇にみなぎって、当時の文学批評の領域で優れたものが結集する場になったのである。

論者の中には、宋词の詞壇の婉約（たおやかぶり）を尊ぶ気風には当時の国力の衰えと士人たちの精神の低調さが反映されている、と考える人もいるかもしれない。これは一面的な見方である。婉約詞のなかで情を語るものは、かなりの程度で誠実であり続けようとするばかりでなく、柔らかさの中に強さを持ち、たおやかではあるが決して軟弱なものではない。黃庭堅は婉約派の代表作家である晏幾道の詞を、「さっぱりとして力があり輝いている」⁽¹⁶⁾と称賛しているが、これは決して表面だけの美しさをほめたのではない。また、宋の詞論のなかには、「豪放」「壯詞（益荒男ぶり）」「狂歌」をはっきり唱えた者も見受けられる。蘇軾から辛棄疾・陸游・劉克莊・劉辰翁等まで、詞壇にて愛国の歌声を響かせ、時代を歌い上げるフォルテの響きは、中国歴代の文学作品の中にあってやはり傑出したものである。宋の詞壇と理論界とが奏でた音楽は、もとより一つの音調に限られたものではなかったのだ。

また、やはり注意しておきたいのは、柳永が堂々と「風流才子が詞壇を占領する」⁽¹⁶⁾と公言してより、李清照が詞は「一つの独立した文芸領域である」⁽¹⁷⁾と公然と宣言するに至るまでの現象には、詞人及び詞体の独立が示されていることである。晁補之・李清照・王灼・姜夔・黃昇および張炎・沈義父等は、短い論文を書いたり專著を著したりして⁽¹⁸⁾、それぞれの視角から、様々なレベルで詞の特殊な芸術的規律を検討し、詞の音律の調整、用語の鍛錬、風格体裁などを研究して、多くの貢献をした。彼らは後の人々に豊かな理論批評の遺産を残したのである。

これを要するに、宋代詞学思想の理論批評は非常に豊かな内容を持ち、また特色に富むもののなのであった。本書本編の第三章ではかなりの分量を当てて特にその紹介と評価をしている⁽¹⁹⁾。

三 小説批評に関して

魏晉南北朝の時代は、中国で古典小説が正式に生まれた段階である。この時期に、小説

の観念及びその理論の発展も生まれたばかりの子供の時代に入ったのである。小説創作の発展では、唐宋の時代に飛躍的な質の変化が起こった。唐の伝記と宋の話本などは、中国文学史上に重要な位置を占めるのである。唐の「時にはじめて意図的に小説を作るようになった」⁽²⁰⁾ので、小説の観念にも飛躍的な質の変化が起こったのであった。宋代では唐以来の伝記文学の発展とその芸術的な特徴に対して理論的水準にまで高められた認識があっただけでなく、さらに呉自牧《夢粱録》が当時に新興の白話小説に対して行った研究とまとめや、羅燁《醉翁談録》がこの時期の小説理論の輪郭をわりあい全面的に反映したこと、劉辰翁の小説への評点等⁽²¹⁾のようなものには、新領域を切り開くいっそうの意義があった。彼らは小説創作の特殊な芸術的規律に対して、特に人物形象の練り上げと言語芸術の面で、前人を大きく越える貢献を生み出した。とりわけ具体的な作品と結びつけて評点をつける（文章の傍らに○や点をうって注意を促し、欄外に評語を加える）という新しい批評法の使用面において、劉辰翁はさらに継承と発展の役割を果たし、当時流行の新しい気風を作り出したのであった。小説に評点を加えることは、明清時代にいっそう盛んになり、中国古典小説理論批評の民族的な形式となった。

本書本編の第四章《小説理論発展の概述》では、魏晉南北朝以来の小説観念の発展を振り返るが、重点は唐宋の小説理論批評にある。なかでも宋代の呉・羅・劉の諸家に対する評論では、かなり詳細な分析を加えている。

四 理学家の文学観について

理学は宋代に興った新儒学である。理学と伝統的な儒学とを区別する主な特徴は、性命の学をその学説の核心とし、「治内」「為己」の学を人の教育や治世のための根本としたところにある⁽²²⁾。これが文学批評に影響を及ぼし、立功を重んじ、教化を重んじ、実用を重んじていた伝統的な儒家の文学批評を、道徳及び先験的な万物の道理に対する個人の体得を称揚するものに変えてしまった。この二種は封建倫理道徳の政治教化を維持擁護するという基本的な傾向をともに持つとはいえ、伝統的な儒家の文学観は文学の外にある効用を強調し、理学家の方は文学によって道を持つ者の内面世界を称揚する事に重点があって、その区別は厳然とあるのだ。宋代の理学家は、たとえば程頤が「文を作ることは道を害する」⁽²³⁾とは言うけれども、これは門人たちが熱心に求道に努めるように奨励するための極端な発言にすぎず、文学に対する理学家の視点を代表するものではない。道は文を離れることはできず、道を明らかにするには文辞の助けが必要なこと、これは言うまでもな

いことだ。よって、理学家は道を重んじ文を軽んじたが、決して文辞を否定したのではなかった。文と道の関係について言えば、宋代理学家の論文の主要な特徴は、文学と悟道とを結びつけたところにある。道を悟ることは道を明らかにすることとは違い、さらに次元を深く踏み込んだものである。明道とは道徳を明らかにすることで、文にとってみればやはり外在的なものなのである。悟道とは文によって道を見透すことであり、文学そのものが道の存在の体現なのである。たとえば朱熹は「この文は皆道の中から流れ出たものだ」⁽²⁴⁾という。よって、文と道は本体論の上で一つになったのである。文はそのまま道であり、道心はそのまま文心となる。道心が文心であるが故に、文人と儒家の区別も存在するはずがなく、文人はまず有道の人となり、文学は有道の者の精神の現れとなる。理学家は「一つの理が様々に分かれる」と主張した。一理が万理を統括し、道は普遍に存在する。水撒きから客のお出迎えが道を学ぶことになる以上、文を学ぶことも当然道を学ぶことになるわけだ。ここにおいて、彼らは感情を淡泊化させ、理を味わいとすることを提唱する。自然を彩る風化雪月の姿、空を飛ぶ鳥や水にはねる魚など、どこにでも理は現れており、どれをとっても文学に形象化できるものなのである。また自然のままの創作方法、表面は平淡でありながら濃厚な味わいを持つという審美的趣向も提唱した。北宋の邵雍（1011-1077）は「その物の立場からその物を観る」⁽²⁵⁾という主張をした。それはつまり客観的な太極の道理によって事物を観て、我が主観によって観ないということである。個人的な喜怒哀楽の情感欲望を努めて排除するのだ。しかしながら、文学は作者の個性から離れて存在できるものではない。邵雍は道心と我心を分離させようとしたが、その結果道心と文心とを分離してしまい、その大部分の詩はスローガン形式の理学の詩となってしまったのである。南宋の朱熹（1130-1200）は理学の集大成者であるが、道心を文心とした文学理論の完成者でもあった。彼は「この文はすべて道から流れ出たものだ」という主題から出発して、自由自在に行われた評論は、文学創作・批評・鑑賞から歴史的な発展などの多方面の問題に及び、素描的な体系を作り上げたと言ってよい。朱熹は本体とその顕現である運用形を区分しない観点から文を扱い、道を文の本体と考えた。また文学の相対的な独立にもある程度は肯定的である。文学の美を肯定し、それが性情を陶冶でき、意志を沸き上げさせられるとしたのである。よって、文学の鑑賞は決して道と離反するものではなかったし、鑑賞自体が道学を構成する有機的な組成部分の一つでもあったのだ。朱熹と同時代の陸九淵（1139-1193）は「心がそのまま理である」⁽²⁶⁾と主張して、心によって理を明らかにしようとしたため、彼が文を論じる時には文学における個人の意識と創造精神に対する優れた

視点が多くある。その影響が宋の末の包恢（1182-1268）に及ぶと、「出典に使用されてきた古の書籍などなくても、真の詩は存在できるものだ」⁽²⁷⁾ というスローガンが出されるのである。たとえ彼が言う「真」というのが理學化されたものであり、それが封建的な倫理の拘束の下で言われる真ではあっても、しかし文学における個性及び創造性の精神に対するこの重視は、元・明時代の性霊重視の思潮に対して深い影響を与えている。

本書本編では第五章にて宋代理学家の文学観に対して、単純に否定したり肯定したりはせず、実際の事象に基づいて判断を下し分析を試みている⁽²⁸⁾。

注 釈

（1）原書第三篇第二章第一節では、徐中玉氏の説：「詩を論じる著作を詩話と題するのは、宋の歐陽脩の六一詩話に始まるのは確かだが、詩話の呼称を考えると、その源は唐末・宋初の物語を語った「詩話」つまり「平話（講談に類似する）」の流行と関係があると考え」との説を引く。

（2）歐陽脩の《六一詩話》は、今日彼の文集である《歐陽文忠公文集》（《四部叢刊》所収）一百五十三卷の卷一百二十八に《詩話》と題して収められている。《六一詩話》は、歐陽脩が汝陰に隱遁した後の作品で、最晩年の作品である。《六一詩話》には、二十八の逸話が排列されているが、その逸話には系統性は見られない。本来《六一詩話》はただ単に《詩話》と呼ばれていた。それは司馬光が《続詩話》を作成した時にその序に「詩話は尚遺れる者有り。歐陽公の文章名声は及ぶべからずと雖も、然れども事を記すは一なり。故に敢へて続けて之を書す」とあることから、歐陽脩の《六一詩話》は、もともと《詩話》と呼ばれていたことがわかる。その後、詩話が陸續と作られたため、歐陽脩の《詩話》を《六一詩話》と呼ぶようになった。原書第三篇第二章第二節に《六一詞話》についての詳論あり。

（3）《滄浪詩話》は、五章と《答出繼叔臨安吳景仙書》という一篇の書簡から構成されている。《詩弁》は理論的綱要、《詩体》は詩歌の形態と風格流派を検討し、《詩法》は制作方法と創作の原則、《詩評》では具体的な批評と鑑賞を展開し、《考証》では伝統的詩話の随筆記事に従って作家と作品に考察を加えている。また、《答出繼叔臨安吳景仙書》は《滄浪詩話》の序言と見なすことができ、そこには理論の趣旨や意図等の説明がなされている。詳しくは、《南宋詩文批評・緒論》部分を参照のこと。嚴羽については《南宋詩文

批評・緒論》の注（27）を、《滄浪詩話》の注釈本については注（28）をそれぞれ参照されたい。

（4）原書第三編第二章では、具体的に《詩話總龜》《茗溪漁隱叢話》《唐詩記事》《石林詩話》《歲寒堂詩話》《白石同道人詩話》が取り上げられ論じられている。

（5）詞がいつ生まれたかについては、諸説があり現在のところはっきりとは断定できないようである。たとえば、沈括の《夢溪筆談》巻五には「唐人は乃ち詞を以て曲中に填入し、復た和声を用ひず。此の格は王涯より始まると雖も、然れども貞元・元和の間、之を為る者已に多し。また王涯の前に在る者なり。」とあり、唐代（中唐）起源説を打ち出す。朱熹やわが国の鈴木虎雄、青木正児等多くの学者は、いずれも中唐起源説を取る。一方、任二北は《敦煌曲初探》の中で、敦煌より発見された《雲謠集》等の雑曲の研究からその源流を隋に置いている。また、唐代はシルクロードを通して西域の異民族の音楽が流入し、そうした新しい音楽にあわせて、新しい歌辞が生まれた。それが詞の起源と考えることもできる。ただし、詞が独立した文学形式として発展しはじめるのは、晩唐の温庭筠（812?～873?）の出現をまってからだと言えよう。

（6）五代時代に文化が栄えた後蜀（937-965）と南唐（937-975）で詞は広まった。今の四川省を中心とする後蜀では、九百四十年に最初の詞のアンソロジーである《花間集》が編纂された。《花間集》十巻は後蜀の趙崇祚の編で蜀の詞人を中心に十八人の作者、五百首を収録する。その冒頭に晩唐の温庭筠の詞を六十六首収めており、これは五代の詞人が温庭筠を模倣していたことの表れであろう。一方、長江下流域の江南の地を領有した南唐では、宮廷を中心に詞は栄え二代目の天子・李璟（916～961）と三代目の天子・李煜（937～978）は詞に優れ、とくに李煜は古今を通しての代表的詞人の一人である。また、李璟の時の宰相・馮延巳（903～960）の詞風は、北宋初期の詞に深く影響を与えた。たとえば、歐陽脩や晏殊の詞が馮延巳の作品と一部混同して伝えられている現象がみられる。これは馮延巳と歐陽脩・晏殊の詞風が類似していたことを表しており、ここに馮延巳の影響を見出すことができる。

（7）現在に伝わっている宋代の詞を可能な限り網羅的に収集した唐圭章の編した《全宋詞》によれば、収録詞数是一万九千九百余首、その作者は一千三百三十余人である。また、詞の種類については、清の康熙年間に編纂された《欽定詞譜》によると、八百二十六牌、二千三百八体が確認される。

（8）詞の呼称は様々あり、宋代に盛行したので「宋词」と言うことが多い。また、詞は

楽曲に合わせたものであるから「曲子」と呼ばれ、曲子にあてはめられた歌詞は「曲子詞」とも呼ばれた。字形は長短句体なので、「長短句」と言い、楽曲に合わせてつくるので「倚声（声による）」、詞譜にあてはめられて作るので「填詞（言葉をうめる）」、詩から生まれたので「詩余（詩の付属）」と言い、「楽府」という伝統的な歌いものの名で呼ばれることもある。

（9）胡寅（1098～1156）、字は明仲、福建崇安の人。金が南侵してきた時、彼は時の高宗に上書して北伐を主張したため、時の宰相・呂頤浩に憎まれた。徽猷閣直学士を以て致仕した。諡は文忠。致堂先生と称された。《題酒辺詞》或いは《酒辺詞序》と称される詞論がある。

（10）胡寅の《題酒辺詞》或いは《酒辺詞序》の中の語句。

（11）潘閔（？～1009）、字は逍遙、一説には逍遙子と号す。大名（今の河北に属す）の人、一説には広陵（今の江蘇揚州）の人。引用は彼の《与茂秀書》の中の語句。

（12）北宋の仁宗の嘉祐三年（1058）に馮延巳の外孫・陳世修が《陽春集序》を作り、馮延巳の詞の創作背景や形式特徴を論じた。ここはその中の語句である。

（13）晏幾道は、《点絳脣》詞で「天與多情」、《鷓鴣天》詞で「天將離恨惱疎狂」と言い、はっきりと「多情」や「疎狂」と称し、一種の自由な境界に入った。これは明らかに宋儒の「文以載道」の説や宋詩の説理の風格とは異なっている。

（14）歐陽脩は《玉楼春》詞の中で「人生自是有情癡」と言う。これは、「多情」から更に一層進んだ境界だと言える。

（15）黄庭堅の《小山詞序》の語句。

（16）柳永《西江月》の語句。

（17）胡仔《苕溪漁隱叢話・後集》卷三十三に掲載する李清照《詞論》の中の語句。

（18）晁補之の詞論は今日彼の文集である《鷄肋集》には収められていない。胡仔の《苕溪漁隱叢話・後集》卷三十三に引く《復齋漫録》に晁補之の《詞評》とあり、また《評本朝樂章》とも称されている。李清照は注（17）参照。王灼の詞の专著は《碧鷄漫志》と言う。姜夔は詞の专著はないが、幾つかの作品の中に彼の詞論が読みとれる。たとえば、柴望《西涼鼓吹》自序には姜夔の詞学の趣旨が窺えるし、周密《齊東野語》に引く姜夔の《自述》に彼の見解が表れている。更に、姜夔は音楽に精通していたので、その見解がしばしば彼の詞の小序に表れる。黄昇は《花庵詞選》、張炎は《詞源》、沈義父は《學府指迷》にそれぞれの詞論が窺える。

(19) ここに挙げられた者のうち、晏殊・晏幾道・張先・歐陽脩・柳永・王安石・蘇軾の詞学理論については、原書の第三章第二節でそれぞれ詳しく取り上げられており、同第三節に黃庭堅・晁補之・李清照、第四節に陸游、第五節に辛棄疾・劉克莊・劉辰翁、第六節に黃昇・張炎・沈義父がそれぞれ取り上げられその理論が詳論されている。

(20) 魯迅《中国小説史略》の語句。

(21) 劉辰翁の評点は、文学上の視点からその長所や欠点を指摘するところに特色がある。明人は彼の評点する所を集めて、《劉須溪批評九種》を作っている。その内容は、《班馬異同評》三十五卷、《老子》、《莊子》、《列子》上下卷、《世說新語評》三卷、《王摩詰詩評》四卷、《杜工部詩集解》二十卷、《李長吉歌詩評》四卷、《蘇東坡詩評》二十五卷である。その他、《劉須溪批評九種》に含まれずに現存している評点は、《孟浩然詩集評》二卷、《王荊公詩文評》五十卷、《須溪精選陸放翁詩集評》八卷、《須溪評点簡齋集》三十卷（附《住詞評》）である。《南宋詩文批評・緒論》の注釈（29）を参照のこと。なお原書第三編第三章第四節にて詳論。

(22) 宋代の理学家は自己に内在する思想品德を修養することを立身及び治国の本としていた。これを治国経済の道を説く治外の学に対して“治内（内を治める）”、“為己（己を為す）”学という。

(23) 程頤《遺書》卷十八の語句。

(24) 《朱子語類》卷一百三十九《論文上》の語句。

(25) 邵雍の政治哲学の基本的観点は「観物」である。かれは《観物内篇第二》の中で、道を解釈して「人の能く万物に盡たる所以は、其の目能く万物の色を収め、耳能く万物の声を収め、鼻能く万物の気を収め、口能く万物の味を収るを謂ふ」と述べ、これは人々が通常理解できる所に立脚した感性生存の唯物的観点である。邵雍はこれを「以我観物」と称した。

(26) 陸九淵は心を活発に躍動させることを第一義とし、「宇宙は便ち是れ吾が心、吾が心は即ち是れ宇宙」とし、更に進んで「六経は皆我が注脚」と心によって經典ものりこえようとする。すなわち「心即理」であり、これは朱子の「性即理」と対立するものとなる。

(27) 《石屏詩後集序》の語句。

(28) 理学家の文学観としては、北宋の石介・周敦頤・邵雍・程頤・程頤、南宋の朱熹・呂祖謙・樓鑰・真德秀・魏了翁・陸九淵・包恢・薛季宣・葉適について同書第三編第五章にて詳論。

黄			
---	--	--	--

[illegible]

(26)